

大学一般教育としての芸術（美術）の位置づけ

——ベン・シャーンの場合——

沼本秀昭

(受付 2018年10月31日)

1. はじめに

大学における教育課程の編成については、幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養するものと大学設置基準第19条にある。その役割として一般教育に対する期待は高い。日本の大学教育に一般教育が必要であるという方針は、1945年敗戦の翌年、1946年春に来日したアメリカ対日教育使節団の報告書によるところが大きい¹⁾。その報告書の中では「日本の高等教育機関のカリキュラムにおいては、…大概是普通教育を施す機会が余りに少なく、その専門化が余りに早く又余りに狭すぎ、そして職業的色彩が余りに強すぎるように思われる」と指摘されている²⁾。日本の大学における一般教育の始まりは、長い歴史や宗教的思想の中で、内からの必要で生まれたヨーロッパやアメリカの一般教育の性質とは全く違っていたのである。

その後、導入された一般教育は出発時から大学人のおおよその共通理解になっているものではない³⁾、中途半端なスタートとなり、また現今の多くの大学で、専門教育の外に必要と考えられる各種の教育活動を教養教育と呼んで含めてしまう、理念・思想の不明確な多義性が蔓延している現状がある⁴⁾。

多様化する現代社会、人工知能などの科学技術が進化するなど、私たちを取り巻く環境は目まぐるしく、実用化、専門化に向かっている。だからこそ日本における一般教育について、今一度その重要性を改めて考え直す必要があるのではないかと考えた。その中でも全体的に共通した指導が難しく、多種多様な価値観と向き合い、個々の直観や感性などに直接働きかけることが必要となる芸術（美術）教育に焦点を当てる。

今から約60年前の1956年、ハーバード大学の芸術講座で一般教育の重要性を説いた一人の画家がいた。アメリカ現代絵画の巨匠ベン・シャーンである。彼はハーバード大学の芸術講座チャールズ・エリオット・ノートン記念講座の教授に任命され一年間の講義を通して一般学生のための芸術（美術）教育を行った。画家ベン・シャーンが講義した一般教育としての芸術（美術）教育とは具体的にどういうものだったのか。今後の一般教育としての芸術（美術）教育を考える上でこのベン・シャーンの実践を紐解くことは有益であると考えられる。

そこで、本論の目的はハーバード大学チャールズ・エリオット・ノートン記念講座のための一年間にわたる講義案を基に出版された『ある絵の伝記』を中心にベン・シャーンの経歴と照らし合わせ考察を行い、ベン・シャーンの大学における一般教育としての芸術（美術）教育の位置づけについて検証するものとする。

2. ベン・シャーンの経歴（表1）

ユダヤ系の両親をもち、幼少期にアメリカに渡り移民の子どもとして育ったベン・シャーンは恵まれたとは言い難い環境で育った。石版画工房で働きながら夜間学校で学んだ後、複数の、高い学費を必要としない大学を卒業後、画家の道を歩み始める。当初はヨーロッパ美術の影響のもと、制作に励んだものの自らの描きたいテーマを見出せずにいた。その転機になったのが、『ドレフュス』シリーズ、『サッコとヴァンゼッティ』シリーズであった。

19世紀末に不当に告発され罰せられたフランスのドレフュス大佐の事件を扱った『ドレフュス』シリーズ、無政府主義者で徴兵忌避者の冤罪事件を扱った『サッコとヴァンゼッティ』シリーズは、その後、労働運動弾圧が目的とささやかれた冤罪事件『トム・ムーニー』シリーズへと続いていく。これらのテーマとなったのは社会で抑圧された弱い立場の人々の姿であった。それらの人々への関心はベン・シャーン自身の厳しい生い立ちが影響していると考えられる。そのような側面からもこれらの作品はベン・シャーンにとって意義深いものであり、また社会の反響も大きかった。普段絵をみない人々が、これらの絵に関心をもち多くの人々が展覧会に訪れた。

『サッコとヴァンゼッティ』シリーズをみてその才能を評価したメキシコ画家ディエゴ・リベラはロックフェラー・センター RCA ビルのフレスコ壁面制作に、ベン・シャーンを助手として参加させる。このことは、その後ベン・シャーンが一般社会の人々へのメッセージ性が強い壁画制作に、数多く関わっていくきっかけとなった。1935年には、再入植局でポスターや資料ファイルの作成に従事する。この頃からベン・シャーンは弟から譲られたカメラで数多くの写真を撮り始めている。そのほとんどが社会の底辺だと考えられる環境で生活する人々の姿であった。レンズを通しベン・シャーンの社会をみる目はより日常の中の個々人の生活を見つめたものへと変化していく。1942年には戦時情報局に携わっているが1943年には離れている。ここで制作されたポスターには直接的な戦争の場面を描いた表現はみられない。

戦後になると画風は具体的な場面設定を描いたものから、象徴的な意味をもつイメージを組み合わせた表現形式へと変化していく。その代表的な作品が『寓意』である。この作品は、ベン・シャーンが一つのテーマについて多様な方向から見続け、考え続け、描き続けた結果辿りついた形式であるといえる。しかし、内容は一層個人的・内面的なものになっていくが故に、結果として難解さも招いたといえる。

表1 ベン・シャーンの経歴

年	経歴
1898年	リトアニアのカウナスで生まれる。両親はユダヤ系。父親は大工であった。
1906年	家族と共にアメリカに渡り、ニューヨークのブルックリンに住む。
1913年	石版画工房で徒弟として働きながら、夜間学校に通う。
1919年～ 1922年	ニューヨーク大学さらにニューヨーク市立大学を卒業した後、ナショナル・アカデミー・オブ・デザインで学ぶ。
1925・27年	ヨーロッパで絵画を勉強する。
1930年	ダウントウン・ギャラリー（ニューヨーク）で初個展を開催する。『ドレフェス』シリーズを描く。
1932年	ダウントウン・ギャラリー（ニューヨーク）で、『サッコとヴァンゼッティ』シリーズ23点を展示する。
1933年	ダウントウン・ギャラリー（ニューヨーク）で、『トム・ムーニー』シリーズ15点を展示する。ロックフェラー・センター RCA ビルのフレスコ壁画制作に、メキシコの画家ディエゴ・リベラの助手として関わる。
1935年	ニューディール政策のための機関である再入植局で、ポスターや資料ファイルの作成に従事する。再入植局は1973年に農業保護局に改編される。
1940年	ジュリアン・レヴィー・ギャラリー（ニューヨーク）で、『サンダー・ペインティング』シリーズを展示する。
1942年	戦争情報局で、ポスターなどを制作する。
1947年	ニューヨーク近代美術館で回顧展が開催される。
1956年	ハーバード大学チャールズ・エリオット・ノートン記念講座の教授として講義する。
1960年	ハーバード・マガジン誌「ラッキードラゴンの航海」に描いた挿絵をもとに『ラッキードラゴン』シリーズを制作し始める。
1968年	版画集『一行の詩のためには…：リルケ「マルテの手記」より』を制作する。
1969年	ニューヨークの病院で死去（70歳）。

ベン・シャーンがハーバード大学で教鞭をとるのは、この頃である。ハーバード大学ではチャールズ・エリオット・ノートン記念講座という一般学生のための芸術教養講座を開講している。第1回目はハーバード・リードであり、それ以降著名な音楽家や文学者が年々任命されてきた⁵⁾。ベン・シャーンは1956年度の教授として任命されたのである。ベン・シャーンはこの講座以前から様々な場所の芸術（美術）講座に出講し、その多くのものは教育的なものであった。大変な読書家で勉強好きであったベン・シャーンは広汎な知識をもっており、自身の思想を強く持っていたといえる。

その後、アメリカの原水爆実験を扱った『ラッキードラゴン』シリーズ、版画集『一行の詩のためには…：リルケ「マルテの手記」より』を制作する。

ベン・シャーンはまた、絵画以外の分野でも才能を発揮した。先に触れた壁画やポスター、

写真のほか、絵本やレコードのジャケットデザインなどにも取り組み、優れた作品を残している。長年の継続した制作はともすれば固定した表現形式に陥りかねない。しかしベン・シャーンは常に厳しくその表現内容を問い続けた。そんなベン・シャーンだからこそ、色々な分野での柔軟な展開が可能だったのではないであろうか。様々な人やものに関心を抱き、まなごしを注いだベン・シャーンは様々な分野の表現形式にも関心を抱き、価値を見出していたと考える。

3. 芸術（美術）教育の面からみたベン・シャーンの画家ならではの指摘

ベン・シャーンは具体的にどのような講義を行ったのであろうか。講義案の題目は次の6つであり、その内容を簡単にまとめる。

①芸術家と大学

大学を卒業してさえも他国はもとより自国の芸術にも疎い卒業生の姿への憂い、「全人」⁶⁾の理想にむかうため、直観的・感性的な知識を育む芸術（美術）教育の重要性についての強い思い。芸術を取り巻く大学の姿や講座開講の思いについて。

②ある絵の伝記

作品『寓意』について批判的な評論家への自己解説など、自身の芸術についての創作過程と意図、想いについて。

③内容の外形

表現とは訴えたい内容があるからこそ、必然性のある形式につながるのだという信念。芸術（美術）作品の内容と外形は不可分な関係であるという考えについて。

④異端について

自分とは異質なものへの無理解への警鐘。異端はよき思想、芸術が生まれるための基本的大前提であるという考えについて。

⑤現代的な評価

現代社会を取り巻く評価への疑問。作品自体に内存する本質を直観的に捉えようとせず、形式的考察に留まっている現代的な評価について。

⑥芸術家の教育

画家として生きてく中で大切にしている信念。芸術家の教育に必要なだと考える教養、教育とその統一について。

講義案からは芸術（美術）教育についてベン・シャーンの画家ならではの指摘を読み解くことが出来る。その一つは「主観的写実主義」という考え方である。写実主義とは客観的現実を尊重して、それをあるがままに描写しようとする芸術制作の態度ないしは方法であり、

抽象化，理想化する方法と対立し，対象の細部の特徴まで正確に再現され，記録の手法に近づいたものをいう⁷⁾。ベン・シャーンはこの写実主義に全く異なる意味を持つ「主観」を付け加えている。その意図についてベン・シャーンは，対象は「細部まで鋭敏な眼で観察されねばならないが，かかる観察は総て，内面的な見方から形成されねばならない⁸⁾」と語っている。主観的にみるということは自己の内面との対話ともいえる。自己の内面とは，それまでの人生の蓄積を土台として成り立っている。つまり主観的にみるとは，言い換えれば，これまでの人生を通してみることといえる。

確かに客観的描写に長けたカメラを例にとって考えてみても，同じ対象を同じカメラを使って複数人が撮影したとしても，人数毎に構図・視点・露出・シャッタースピードなど様々な違いが生じることは想像に難くない。対象に対しての一人ひとりの受け止め方の違いが写真には明確に現れる。それは撮影者の感性やものの見方の違いの表れである。人間は無意識に，どのような対象をも主観的に捉えている。そのことに気付き，より意識して対象を捉えることが重要だと指摘していると考えられる。ベン・シャーンは，それが「想像力の涵養や，人間的なものの見方⁹⁾」を養う芸術（美術）教育ならではの要素だと考えていたのであろう。

また，ベン・シャーンは画家になるためには，教育と共に幅広い教養を身に付けることの必要性を説いている¹⁰⁾。その意味とはどういうものであろうか。講義案に書かれたベン・シャーン制作活動の姿，また同年代に活躍しベン・シャーンもその芸術性を認めていた彫刻家イサム・ノグチ，ヘンリー・ムーアやジャクソン・ポロックなどの制作過程などを参考に，まずは芸術家の制作過程について触れてみたい。一般的に芸術家は常日頃から現実社会と関わる中で関心のアンテナを色々な分野に広げている。そのアンテナが常に何かを拾うこともあるし，そうでない場合もある。その基準は芸術家の直観・感性であると考えられる。関心のアンテナに触れるものがある場合，それらについてもっと知りたいと詳しい情報を集め，知識を広げる。その知識はそのもの自体についての知識であったり，そのものの持つ歴史，背景，社会的な評価・価値など，間接的な知識であったりもする。また知識を増やすばかりではなく，詳細な観察をする。それは芸術家ならではのデッサンという手段である。現にベン・シャーンやヘンリー・ムーアも実に数多くのデッサンを残している。知識を広げ，詳しく見る過程を通して，自分にとってそのものはどういう意味を持つのか，なぜ関心をもつのかをこれまでの経験と照らし合わせてその理由を探ろうとする。しかし，関心をひくものについて知識や経験からでは解き明かすことのできない，言葉では言い表せない場合がある。ともすると，その状況の方が多いかもかもしれない。

この過程は関心を持つものが自分にとって情熱を込めて作品という表現にまで高められるものかどうかを心のふるいにかけて確かめているともいえる。それは短期間の場合もあるし何年何十年もの長期間に渡る場合もある。また，同じ内容であっても心のふるいにかける時期の違

いによって残るものが変わってくる。芸術家の大切にしたいと思うものの見方や考え方・価値観の変化によって、言い換えるならば教養によって心に残るものの基準も変わっていくのである。このようなふるいにかけて残ったものが表現のテーマとして展開していくこととなる。

表現したいテーマとして捉え始めてからも、なおもそのものについての知識を増やし、詳細な観察を重ね、経験と照らし合わせていく過程を続けると共に制作へと移っていく。作品の大きさや技法・素材の選び方など、すべてはテーマを表現する目的のもとに吟味される。そこで芸術家は主観的ともいえる情熱溢れる自分と客観的ともいえる冷静な目をもつ自分との間で、もがき苦しみながら制作をする。作品を生み出す過程とは深く自分自身と対話をすることであり、自分をより深く理解しようとする作業である。関心をひいてやまない何かにひかれる自分の正体を知りたいと願うのである。その結果として芸術家の分身ともいえる一つの思想を帯びた作品が生まれるのである。作品は芸術家の手元を放れてからも、鑑賞者によってその意味や価値について問われ続けることとなる。芸術家は一人歩きを始める作品についてもなお見続けることになる。そうしてまた制作を重ねていくのである。

上記のように、制作を通し、知識や知恵を身に付け、これまでの経験と照らし合わせ、自分自身の見方や考え方、価値観を視覚形象に置き換え作品として表現することを繰り返す芸術家の姿勢はまさしく教養を養う姿であるともいえる。その過程で作品の内容は研ぎ澄まされ、洗練されたものとなり、その芸術家でしか表すことのできない価値観を持つ作品となるのである。ベン・シャーンは「なにを描くか、いかに描くか、さらに、いかに生きるか」¹¹⁾ということに拘り続けた。そして制作する姿を「巡礼の旅」¹²⁾に例えるまでの境地に立っている。作品が自分にとって真実の姿に近づく、そのために教養が必要であると主張する点についても芸術（美術）教育としてのベン・シャーンの独自性を読み説くことができる。

4. ベン・シャーン、大学における一般教育としての芸術（美術）教育とは

ベン・シャーンは一般教育としての芸術（美術）教育を通して学生に何を語ろうとしたのか。講義内容は芸術作品についての解説ではなく、芸術家の姿についての解説であったといえる。芸術に親しもうとするとき、私たちはつい、作品自体の知識や情報を得ようとする。そして作品についての理解を深めたつもりになりがちである。作品の理解で終わることなく、芸術家が何を感じ考えどのように生きようとしたのか、に焦点を当てることにより芸術活動への興味関心を一層引き出せると考えていたのだろう。ゆえに、多くの芸術（美術）講座を担当しながらも、制作を披露するような講座の依頼には応えていないのであろう。

講義案の内容はベン・シャーンが画家として制作を通し社会の中で自分自身と向き合い問い続けた姿であった。その自問の姿をみせることで学生に同質の問い掛けをしていると考え

る。講義案の内容を芸術（美術）の世界と限定せず、一般社会に置き換えて考えるならば次のような内容となるのではないだろうか。社会の中で生きる自分自身の意味や目的、社会的役割についての問い、自分の行為の目的や行動の意識化、思考と行動の同一化、多様な価値観の評価・既成概念に捕らわれない視点の重要性、自分の根底をなす人間としての思想の育み方などである。そして、すべての講義案に共通し重要視されていることは自分の思想を持つことである。

では、どのような方法で社会に流されない自分の思想の確立が出来るものとしているのだろうか。方法について、ベン・シャーンは仮に馬鈴薯畑や自動車修理工場などで働いていたとしても、その職から得られる経験をよく観察し「どんな人、どんなものに対しても注目に値せずとして見下げてはならない」¹³⁾、「眼は、生まれたばかりのときには、全然見えないものだ。訓練を経て、眼はその見るものを理解しうるようになる」¹⁴⁾、また、読書を勧め、人と話し合い、充分にみることを、考えること、聴くこと、気付くことを大切にすること、そして教養と教育を身に付け、統一されることの大切さなどについて語っている。

この方法は、当たり前のように過ごしている日常をみつめ直す手段でもあると考える。繰り返される生活の中では、ともすれば自分の思想がなくとも社会の流れに身を任せ生活を送ることはできる。それは次第に自分の思想を持つことを放棄してしまう危険性をはらんでいる。自分の思想を持つためには社会の流れに身を任せることから脱却することである。不確かで、常に正しいとはいえない社会に流されることなく、まずは自分自身のどんな些細な経験であっても、様々な境遇の人々に対しても、自身の人間的な直観力と想像力を大切に観察すること、気付くことを重要視している。そして、それをより深化させるためには教養と教育が必要であると考え、これらが統一されることが「全人」の理想に近づくと期待しているのである。

自分の思想が変容することで、新しくみえてくる何かがある。そこから知的欲求と共に行動が生まれる。そして知識や経験が増し、思想が一層鍛えられ次への新たな世界が広がっていく。これらの往還のスパイラルの中で自分の思考は確立されていくものだと考える。これが一般教育としての芸術（美術）教育でベン・シャーンが学生に伝えたかった内容・方法であると考えられる。

5. 講座案にみるベン・シャーンの視点

ベン・シャーンは、市井に生きる普通の人々を数多く写真に収め、時には自然な表情を撮りたいあまりに特殊なファインダーを使い、隠し撮りまでしている¹⁵⁾。また晩年、日本に滞在中、農家でごろた石に自己流の顔を彫り続けているという素人彫刻家と意気投合し、日本で初めて彫刻家に会ったと大満足して、彼から作品を買っている¹⁶⁾。

ベン・シャーンはすべてのものに価値があるという視点を持っていた。そしてそれに気付けることが大切だと考えていた。それはベン・シャーンの生い立ちからくるものだと考える。社会からユダヤ系、または移民というレッテルを張られ、抑圧された自身の幼い頃の経験はその不条理さに理由もなく耐えなければならなかった。それは、一人ひとりの人間としてみられる以前に、ユダヤ系、または移民という社会の見方が先行されたためである。これらの経験からくる社会に対する疑問や冷静な眼差しは、その後ベン・シャーンの人生に常に付きまとったことであろう。徐々に知識を蓄え経験を重ね教養を身に付けることで、幼い時には見えなかった不確かで、常に正しいとはいえない社会の姿に気が付き始める。理解しがたいその想いは冤罪事件をテーマにした作品シリーズとなり社会的権力にも反抗せざるを得ない強い思想と行動を起こさせたに違いない。そして、徐々に人間そのものが作品のテーマとして展開していったのであろう。

ベン・シャーンは社会の見方、考え方、価値観に流されることなく、自身の見方、考え方、価値観で一人ひとりの人間を見つめていたのだろう。そして、厳しい環境の中でも自分の生きる社会に根を張り素直に自身と向き合い堂々と生きている人間の姿こそ、ベン・シャーンが愛する、理想とした人間の姿だったのではないであろうか。そこに人間としての力強さ、美しさ、たくましさなど、人間の存在の価値を見出し絵画制作のテーマとしていたのであろう。

ベン・シャーンが講座を担当した当時、アメリカ美術界では抽象表現主義が台頭し始めていた。そして、これまで多くの展覧会に出品し評価されてきたベン・シャーンの名前は、次第に美術の最前線から姿をひそめるようになっていた。そのような新たな時代の流れに対しても迎合しなかったのは、冷静な態度でこれまでの自分の制作姿勢を信じて、貫こうとするベン・シャーンの覚悟でもあったと考える。

そのようなベン・シャーンの講義案からは画家としての思考や考察だけではなく、人としてどのように生きるかという思考や考察を強くうかがうことができる。何を考え、どう行動すべきなのか、いうならば教育者としての思考や考察である。画家と共に教育者としての複眼的な思考や考察があるからこそ、一般教育としての芸術（美術）教育として成立しているのであろう。

6. ま と め

ベン・シャーンの、大学における一般教育としての芸術（美術）教育について、次の内容が明らかになった。画家ベン・シャーンならでの独自性のある指摘として、主観を通して現実の世界をありのままに捉えると同時に客観性をもって自己の内面の世界もありのままに捉えるという主観的写実主義の立場と、絵画制作とは自分の真実を求める姿であり、そのため

には教養の必要性を強く説く姿勢である。また、画家としての思考や考察にとどまらず、社会に流されない自分の思想を確立していくことの必要性を説き、人としてどう生きるかを問う教育者としての視点があることである。

これらはベン・シャーンが人生を通して身に付けた教養と教育の統一であったともいえる。その根底には「すべてのものには価値がある、そのことに気付けることが大切だ」という見方や考え方、価値観である。ともすると、見えているようで見えていない、考察しているようで考察できていない、理解しているようで理解出来ていない社会との向き合い方である。人やものについての見方や考え方、価値観に新たな視点が加わることで、これまで何気なく過ごしてきた日常が全く違うものにみえてくる。また、思考や考察にも変化が起こり、それは行動にも表れてくることから生き方の変化に繋がるのである。

この芸術（美術）教育は画家ベン・シャーンが独自性ある指摘を通し、「人としてどう生きるか」をテーマに位置づけた講座であったといえる。「これが私の生き方だ、では、あなた方はどのように生きるのか」と問い掛けてきているようである。

ベン・シャーンは一般教育について、「内容であるだけでなく、方法になり、他の内容への橋がかりになるべきだ」¹⁷⁾と述べている。この芸術（美術）教育での問いかけが、学生それぞれの内容となり、方法となり、他の内容への橋がかりとなったことであろう。

「人としてどう生きるか」、多種多様化する現代社会、人工知能など科学技術の目まぐるしい進化と共に溢れる情報社会の今日、それは一層重要な問題として向き合う必要があると考える。

本論が一般教育としての芸術（美術）教育の意味を考える一助となれば幸いである。

註

- 1) 林哲介, 2013, 『教養教育の思想性』, ナカニシヤ出版, p. 3
- 2) 大学教育学会25年史編纂委員会, 2004, 『あたらしい教養教育をめざして大学教育学会25年の歩み——未来への提言』, 東信堂, p. 9
- 3) 林, 前掲書, p. 4
- 4) 同上, p. 63
- 5) 佐藤明, 1979, 「訳者ノート」, 『ある絵の伝記』, 美術出版社, p. 184
- 6) 知情意の調和のとれた「全人」教育の重要性を強く説く背景として、1956年当時のアメリカの持続的な経済成長が挙げられる。そこには編重した理工学系の専門的教育の状況があった。
- 7) 佐藤亮一, 1985, 『新潮世界美術辞典』, 新潮社, p. 660
- 8) ベン・シャーン (著) 佐藤明 (訳), 1979, 「ある絵の伝記」, 『ある絵の伝記』, 美術出版社, p. 60
- 9) ベン・シャーン (著) 佐藤明 (訳), 1979, 「芸術家と大学」, 『ある絵の伝記』, 美術出版社, p. 14
- 10) ベン・シャーン (著) 佐藤明 (訳), 1979, 「芸術家の教育」, 『ある絵の伝記』, 美術出版社, p. 155
- 11) 同上, p. 174
- 12) ベン・シャーン (著) 佐藤明 (訳), 1979, 「ある絵の伝記」, 『ある絵の伝記』, 美術出版社, p. 51
- 13) ベン・シャーン (著) 佐藤明 (訳), 1979, 「芸術家の教育」, 『ある絵の伝記』, 美術出版社, p. 157

- 14) ベン・シャーン (著) 佐藤明 (訳), 1979, 「現代的な評価」, 『ある絵の伝記』, 美術出版社, p. 149
- 15) 2012, 「ヘタウマ写真家のまなざし 答える人増田玲」, 『芸術新潮』2012年1月号, 新潮社, p. 50
- 16) (芸術新潮) 編集部, 2012, 「1960年, 京都にて」, 『芸術新潮』2012年1月号, 新潮社, p. 81
- 17) ベン・シャーン (著) 佐藤明 (訳), 1979, 「芸術家の教育」, 『ある絵の伝記』, 美術出版社, pp. 159-160

参 考 文 献

- エリザベル・フランク (著) 石崎浩一郎/谷川薫 (訳), 1989, 『ジャクソン・ポロック』, 美術出版社
多摩美術大学付属図書館, 1996, 『ベン・シャーン——創造のプロセス——』, アートプランニングレイ
野間佐和子, 1992, 『ベン・シャーン』, 現代美術第1巻, 講談社
1970, 『ベン・シャーン展』, 大阪市立美術館/毎日新聞社
1992, 『「ヘンリー・ムーア」展 自作と収集品にみる創造の原風景』, セゾン美術館
1997, 『20世紀絵画の新大陸: ニューヨーク・スクール ポロック, デ・クーニング…そして現在』, 読売新聞社
2011, 『生誕100年ジャクソン・ポロック展』, 読売新聞東京本社

Summary

A Position of Fine Art as General Education in University

——A Case of Ben Shahn——

Hideaki Numamoto

In the context of fine art as general education, it is not easy for university teachers to evenly instruct all the students in a classroom, since they need to respect each student's values in order to inspire their students one by one. This paper examines how Ben Shahn (1898–1969) positioned fine art in general education in university, as an artist who highlighted the significance of it. Examining *The Shape of Content*, published after his Charles Eliot Lectures at Harvard University, and the artist career, this paper explores Shahn's perspective. Shahn, as a subjective realist, defined art work as an inquiry of the artist's self, seeing the reality with his own subjectivity and himself from the objective standpoint. Also, he emphasized the necessity of liberal arts education. Through the artist's unique perspective, this paper clarifies what Shahn thought important: how to establish one's own thought and how to lead one's own life. As an educator, this was his essential views to draw artistic intuition of his students.